
一部50円です

雷と蚊帳

家内が「蚊帳がブームらしい」と言う。「えー」と驚きながら幼い頃の出来事を思い出した。

そのとき、川向こうに雷雲が垂れこめ、雷鳴は遠くに聞こえる程度だった。家のものが縁側に集まり、対岸の集落を眺めていた。その集落は距離にして2キロぐらいはなれていただろう。「落ちないといいのになあ…」と誰ともなくつぶやき、雨に霞んでいく集落を、大きな雷音が響くたびにヒヤヒヤしながら見ていた。

雨が小降りになって、雲の切れ間からは青空がのぞきはじめ、雷雲もすぎ去ったように思えた時だった。突然「バリバリ、ドーン」という轟音とともに、雷が民家の屋根に落ちた。誰かが「落ちた、落ちたで！」と叫んだ。私はじっと見つめていたが、落ちたと思われる屋根には何の変化もない。いつものようなかやぶきの屋根が雨の中にみえる。「うそやろ」と思った瞬間、その家の屋根から白い煙が立ちのぼった。すぐに屋根の軒先から煙と炎が巻き上がって、家は火炎につつまれて「あっ」という間に屋根は崩れ落ちた。落雷から数分の出来事である。村の半鐘がけたたましくカンカン…と鳴り出し、父は消防団のハッピを着て消防ポンプ小屋へ走った。私は、身じろぎせずに燃える家を見ていた。その夜は、怖くて寝むれなかった。

あの頃は、バリバリと雷鳴が轟きにわかになくなって雨が降りだすと、うちの者は皆、家の中に急いで駆け込んだ。薄暗い部屋の中で一息つくつと、父は電気のプロカーを切りに小屋へ走り、母は仏壇の前に坐って練香を焚いて、先祖さまに落雷しないように祈っていた。バケツをひっくり返したようななどしゃ降り雨が来て、稲光と同時に鳴る雷鳴は、近くに落雷した証拠だから恐怖の極みになったものだ。

我が家には怖い雷をさける為の不思議な習慣があった。蚊帳の中に入ると雷が落ちないというのである。大きな雷が来ると部屋隅に片付けてあった蚊帳を急いで張って蚊帳の中に入って祈ったものだ。どういう理由によるのか母は言わなかったし幼心にも疑問はあったが、母がそばに居てくれるから素直に従ったものだ。

ニュースで映っていた蚊帳は、今の住宅には鴨居がなく吊るす事が出来ないから、キャンプのテントのようなシルエットだった。苦笑いしながら、『なんで蚊帳に逃げたのかなあ』と今更ながら思った。オマジナイだったのだろうか。(嘉)

連載 爺捨て山 30

梵店主

先日、山岳会のピア・パーティーで私が「如何に死ぬかが大事で、よく考えないとダメだ…」なんて、えらそうにくだまいていたら、先輩の俣木さんから「DAC阪神支部・のたれ死に同志会をつくらう」と話しかけられ、即、二人で固い握手をして会を作った。

「死ぬ事を考える事は、どう生きるかを考える事である。死生観を論議できる後輩がいて嬉しい。市中で死ぬもよし、山中で死ぬもよし。病院なんかで死にたくない」と先輩は言われる。まさに同感である。

「いつ、どこで、どのように死ぬか」、これを考えておかないと、何のための人生かと思ってしまう。これを考え出すと、身の回りのくだらぬ悩み事は消えてしまう。

我々は、あまりにも多くのどうでもよい事に毎日、あくせくしすぎている。死ぬ事はきわめて重大な人生のドラマのクライマックスであるから、医者や周りの者の余計な世話や干渉は受けたくないものである。ひとりで十分に味わって楽しんで死んでいきたいと思うのである。

知人の麻田さんや奥谷さんなど、のたれ死を希望する人が何人もいる。世間をばばかって、言うのを遠慮していた人も、堂々と「のたれ死に」をしたと言おうではないか。

《ヒマラヤへの道 23》

ガルムツシユ峰 ⑬

貸店主

麓から見て険しく登れそうにない山であつても、実際に登ってみると意外とルートが探せるものである。岩山は長年の風雪によって侵食を繰り返しかえし崩壊を続けている訳だから、必ず割れ目や崩れた岩棚が有るものである。

高い山になれば万年雪があり崩落の岩を避けるルートを雪氷の斜面に見出す事も可能であつたりする。

しかし、現実には登ってみなければ分からないのではあるが、およその推測で登山ルートを模索して決める。この決定で登頂できるか否かが決まる。やり直しは装備や食料、天候からくる登山期間の制限などから、ほとんどの場合不可能と考えて間違いない。

初登頂の際には、登る山を見た直感とも言えるドク感で決める。これまで山を登ってきたカンでいくのである。資料があれば検討するが、全く無い山では、カンでいくしかない。

自分たちが登れると思われるルートを探すのであるが、遠くの間を推察して読むのである。これが難しい。

遠征計画が動き出すと、山岳会の面々

が集まり、山の写真を見て登れる山か否かを検討する。これまでの経験から、登れる可能性をルートとともに研究するのである。

よっちゃん達のガルムツシユ峰もこの検討会が開かれた。詳しい写真や地図も無かつたが、地形的に考えて、そう難しい山ではないだろう、という結論であつた。6288mという標高の低さが、山岳会の重鎮たちの議論への熱意をそいでいたのである。8000mの山だったら喧々囂々の検討会になつただろう。

そんな低調ともいえる検討会であつても、先輩達からいろいろなアドバイスは頂けた。些細なことでも、経験者たちの意見は有難い。無意識であつても困難な局面では生きてくるものであるからだ。

よっちゃんは落石を避けながら必死で登ってきた岩稜で由べえと二人で少し休憩して、ビスケットとウイナーソーセージをかじつた。これからは、まさに正念場だ。6200mあたりを高度計は指している。由べえは、待ちきれないように、アイズに登つたから、難しいルートではな

い、と思った。やはり浮石は多そうだが、だましましたし岩を押さえながら登つたが、酸素が少ないために息は激しく、動作は鈍くなる。

この調子だと今日、ピークまで登れるかもしれないと思ひ出した。よっちゃん

が登っていくと、由べえが岩に腰かけて

なければならぬ落石の巢を下降する危険など考えだすと不安だらけになり、すぐにでも引き返したいという弱気が起きる。

ここは、アフガニスタン、パキスタン、中国、ソ連の国境が接する秘境である。そのうえ人里離れたこの山奥で、事故を起こしても誰も助けに来てくれない。全てを隊員四名で処理しなければならぬ。日本の山とは違ふのである。

よっちゃんは、由べえのやる気を損なわないように、「次のピッチもトップでいくか」と言つたら、由べえは「ああ、いいですよ」と軽く答えて、すぐに「じゃあ、確保お願いしますよ」と言いながら岩稜に取り付いた。よっちゃんは、岩で隠れて見えない由べえがルートのない初

めの岩場に良いルートを探し安全に登ることを祈りながら、確保しているザイルを伸ばしていった。

三十分ほどして、由べえから「ピレー確保、登つてきて下さい」と大きな声がした。よっちゃんは、由べえが意外とスムーズに登つたから、難しいルートではな

い、と思った。やはり浮石は多そうだが、だましましたし岩を押さえながら登つたが、酸素が少ないために息は激しく、動作は鈍くなる。

この調子だと今日、ピークまで登れる

いた。由べえが、よっちゃんの顔を見て「こんな物があります」と言いながら指差した岩棚の奥に小さな缶が見えた。「えっ」とよっちゃんは叫びながら駆け寄つて見た。真新しいキャンデーが入つてゐるような缶を手に取りふたを開けたが何も入つていなかった。

よっちゃんは、愕然とした。缶以外には何も見つからなかつたが、誰かがここまで登つてきたのは間違いない。ここまで来たなら、ピークまで登つたと思えるから、よっちゃんたちの初登頂は無くなつてしまふ。こんなことがあるのか、初登頂の夢が消えてしまつた失望感によっちゃんは泣きそうになつた。

★お知らせ★

「負けるな！よっちゃん」がこのたび本になりました。第一部は、よっちゃんが、大学山岳部に入部して、奮闘するさまが描かれております。

当時、子をもつ親から最も怖れられ入部を嫌らわれた山岳部の内情をそのまま書き上げた実録小説です。

お読みいただければ、登山をされたことのない方でも、冬山の厳しさや夏山の岩登りなどを実感して頂き、山岳部の面白さ、楽しさ、苦悩などを味わつて頂けると思ひます。是非、ご購入下さい。

うちの姉は非常に「たいそう」な人である。義兄が肺ガンを宣告されてからというもの、姉は全人生をかけて、義兄の命を取り戻そうとやっきなのだが、「まあ、〇子（私の名前である）、大変やねん！」と、年がら年中言い続けている。何が大変かという、義兄が食べるものを買い求め、調理して、義兄の口に入れるまでが、とにかくやたら、「大変！」なんだそうである。

先端医療の病院で「動脈硬化も進んでますね、血管、ポロポロですね」と言われてから、（私が直接、聞いたわけではなく、姉からのまた聞きなので、先生の表現は少し違うかもしれないが）、姉は義兄の血管を丈夫にするために、カネも時間も手間も、すべてをかけるようになった。

「ガンより、血管かいな？」と私が意地悪く言うと、このモノ知らずが！と怒りつつ、姉は言うのだ。「血管がな、酸素も栄養も運ぶねん。健康は血管次第や」。ああ、そうですか。

義兄に三度三度、姉が納得したものを食べさせるために、「洗濯もでけへんぐらいやねん」「買い物以外、家を出られへん」と、自分がいかに苦勞してるかを私に話してくれるのだが、当事者の姉は

大変でも、聞いているこっちはアハハハと大笑い。まあ、聞いて下さい。

なにしろ、姉は義兄が食べたいとも飲みたいとも思っていない、ガン根治食を摂らせるのがミツシヨンだから、日々、キツネとタヌキの化かし合い。義兄は化かしたりしないので、タヌキの一方的な化かし戦なのだが、たとえば姉は義兄のコーヒーに「ブラックジンガー」とやらを混ぜる。ブラックジンガーは黒豆やシヨウガのパウダーで、コーヒー代わりに飲める、として販売されている健康食品だが、そりや、コーヒーとは味が違う。

義兄は若いころ、親のお寺の所有地で、喫茶店をやっていたぐらいのコーヒー好きで、インスタントなどは飲まない。だから、そんなものを混ぜられたらわかるに決まっているのに、いつも交わされる会話。

「このコーヒーに何か入れた？」と義兄。「入れてへんけど」と不機嫌にしばらくくれる姉。

姉は、義兄と買い出しに行きたくないねん、と文句を言う。ヒマな義兄は、車で近くへ、出かけるのが好きになっていて、買い物にも同行する。荷物も持ってくるのだから、よいではないかというの、違うらしい。

「ケチやから、好きなだけ買われへんねん」。はちみつでもオリゴ糖でも、姉は一番上等なものを一番大きいサイズの容

器入りで買おうとする。「ほんまにエエやつをやる店は遠いから、せつかく行ったら、ちゃんと買おうときたいねん」。

だが、それを義兄は「ジイッと見てんねんやんか。やりにくいデえ」と姉。たまに、だと思いが義兄が「えっ？ それも買うの？」「そんなにいらねえだろ」とかボソボソと抗議するらしい。

「アタシはな、絶対にムダにはせえへんねん。二人で食べたなら減るから、アタシは食べようようにしてるぐらいやねんか」と姉は私に愚痴るが、義兄が抗議するのにも無理はない。姉が買おうとするものは、義兄には「意味不明」。たとえば、ローズヒップ。姉は「ガンにはビタミンC」と誰か近所のおじさんに吹き込まれたから、ビタミンCの信望者になって、「アスコルビン酸？ 合成のビタミンCなんか、アカン」と、ビタミンCが豊富だというローズヒップがよいと信じ込み、義兄の朝はローズヒップ・ウオーターから始まる（らしい）。そんなしやれたモノ、お

よそ義兄にも姉にも、もちろん私を含めた我が一族郎党、誰にも似合わないのだが、まあ、そんなものを大量に買い込むので、義兄はひそかに、「ええつ」と眉をひそめ、姉は義兄の目を盗んで、買い物カゴに放り込み、コマツナなんかの下にもぐり込ませて、レジまで持って行くらしい。

姉は嘆息する。「アイツと（買い物に）行ったら、お菓子も買いにくいしな」。姉の苦勞は、ほかにもある。無農薬などの野菜は、割高であり買う人が少ないため、「注文したら、2つに1つは、へなへななヤツが入ってくるねん」。姉は、正義感も強いし、自分の家族に対する義理人情は、私なんかの十倍は厚いが、ひとたび、クレマーになると、そこらのヤーさんなどよりよっぽど怖い。テコでも譲らぬ、強さがあり、相手の人はたいがい青ざめて、謝りに飛んで来る。私も勝ち気で、文句つたれ

だが、姉に比べたら、ヘタレである。人生、ほとんど泣き寝入り。たまに文句を言っても、「もう、いいですよ」と電話を切るのがオチだ。まあ、この件については、見解の相違があるかもしれない。姉は言うだろう。「アンタ、私の百倍はシツコイで」。うーん、そう

ともあれ、「最初は、野菜のことや、しやあないかな、と思ってたけど、あんまりやから言わせてもらいました。葉が真っ黒になった野菜はすでに野菜ではないんとちやいますかって」。電話に出た人が、謝りに飛んで来たかどうか知らないが、アーメン！（AO）

らしい。



同窓会 3

五月にも別の同窓会があった。顔ぶれは大学の頃の下宿仲間である。

『そろそろ会って置かないと誰が死んでもおかしくない年齢だなあ』との危惧が年々、募っていた。

そこで二、三人に呼びかけたら二つ返事で賛同した。幹事は私が買ってでた。

第1回目は母校のある京都で開催した。昨年は東京で、今年は大阪で開催した。北の新天地に八人が集まった。昔のよう

に大いに飲み、大いに語り合った。人柄はほとんど昔のままだったが、ひとりだけ違っていた。新興宗教にはまっていたのである。

会話の端々に『輪廻転生』を挟み込んで来た。私は『なんか変だぞ』と感じていた。

そこで何気なく聞いてみた。
「なんか、信じてる？」

「八年前から信仰し出した。切っ掛けは一部上場の社長をしている義弟に誘われた。彼だから安心して付いていった。教理は念仏を抛り所としている。教団名は誤解されてはいけないので言えない。本部は加東市(兵庫県)にある」

「へえ〜」

その場はそれで済んだ。
ところが数日後、誘いの電話があっ

た。

「いい話が聞けるから次の日曜日に一緒に本部に行ってみないか」

その時は仕事があったのでと断った。しかし、いつまでも断わり切れなくなった。毎週、週末になると電話がかかって来たからだ。

「一度は付き合わなきゃならんだろうなあ。他ならぬ昔の親友の頼みである。無碍には出来ない」と思った。

そこでインターネットでその教団を調べてみた。

元信者による書き込みがしてあった。意外にも胡散臭い内容だった。『30年間で1000億円も貯めて総本山を建てた』『集金力はオーム真理教を凌ぐほど』『最初に30万円出して泊まりがけの研修を受ける』『最低三人は済度(折伏)しなければならぬ』『教団名は他言してはいけない』など。

私の警戒感が高まった。「研修というのが曲者だな。監禁状態で洗脳されるのではないか。相手のペースにはまらないうように用心しなければ。耳なし芳一のように般若心経のコピーを体に貼っていかうか」

しかし、結局は行かなかった。妻が強く反対したからだ。

「そんなところ、絶対に行かんといてよ」
「大丈夫だよ。義理立てのために一回

行くだけだから。

行くだけだから。

どんな場合でも自分を見失わない自信がある」

「そう言う自信家ほど洗脳され易いんです。そのお友達も高学歴で商売でも成功している自信家じゃないですか」

「宗教に頼るのは間違いだと思う。自分の主役は自分であるべきだ。キリストだろうが、ブツダだろうが、まして新興宗教の教祖だろうが、他人に自分を乗っ取られてたまるか。俺の考え方はよく知ってるだろう」

「兎に角、行かんといて。どうしてもと言うのなら、向こう(教団)から来て貰うて。他の宗教はみんな足を運んで誘いに来るでしょ。最初から教団まで来いと言うのはおかしいわ」

と頑なに譲らない。つい私は禁句を口走ってしまった。

「よく言うよなあ、お前には言われたくないな」

実は、妻は宗教団体に入っているのである。その教団は西宮に本部があり、天照大神を抛り所とする。

入信の切っ掛けは私の昔の上司で仲人の奥さんに誘われたのである。一度、私も妻と教団へ行ったことがある。しかし二人とも入らなかった。

ところが妻の母と姉が入信した。知らぬ間に妻の実家にも誘いを掛けていたのだ。

それから十五年ほどして妻が入信した。乳癌を患ったためだ。

「癌への不安は医学では乗り越えられない。心を癒やすものがほしい」

そう言われると反対出来なかった。癒やしを与えてやれない自分の無力さを感じた。

「俺は西宮の教団にも入らなかった。だから今度も大丈夫だ」

「相手は洗脳のプロですよ。素人は叶いませんって。私に貴男を止める資格がないと言うのなら私は西宮(教団)に行くのを止めます」

それ以上、突っ張るのは止めた。「そこまですることはないよ。癌と闘う為に必要としているものを捨てることではない。友達には断りの電話を入れて置くよ」

友人には正直に言った。
「妻が強く反対するので止めて置くよ。夫婦喧嘩までして行きたくないから」

「いいよ、無理やり誘ってる訳じゃないから」

突っ慳貪な反応だった。昔のような友への優しさは感じられ無かった。《龍》



「ゴマメの激しい歯ぎしり」

「ナメるなよ、東電 その4」

■東電の株主総会、アレでいいんですか？

皆さん、そろそろ忘れかけていると思うが、東電の株主総会(6月28日)、ムカつきましたよねえ。総会の会場にいる人たちが、脱原発を叫んでいるのに「賛成多数で、原発を維持します」

って。ゴマメ(私)は耳を疑った。「はあ?何て?」。いま、会場にいる人たちが言っていることは、まったく無視して、採決が取られ、全部「否決」で決定する。最初、意味がわからなかった。株主に送られてくる「議決権の委任状」これを出した人も、出さない人も、委任したことになって、株主総会を主催する会社側に入れられてしまう。株主総会に実際に出かける人の数など、いくら今回のように過去最多の9千人に及んでも、全体から見れば、わずかだ。だから、最初から、すべて決まっていたのだ、東電側の意向通りに進められる、と。

昔から株主総会なんて「シャンシャ

ン総会」で、そのための総会屋なんて輩もいて、ロクなもんやないと知ってはいたが、今回の東電の株主総会は世界中が注目している「フクシマ」がらみだ。まさか、そんなお粗末な、ヒトをナメた真似はできないだろう、と思っていたが、いやいや、東電、おそろべし。

最初っから最後まで、「原発、やめるわけないやろ、ボケが! 言うとな、言うとな、お前らがナンボ、ワーワーキヤーキヤー言うても、これが一番手っ取り早くて、儲かるんじや」という姿勢、貫き通したもんね。

ある意味、すごいわ。まかり間違っていたら、福島・日本だけじゃなく世界中に放射能被害をもたらしていたかもしれないのに、「原発事故と供給力不足による計画停電で、社会の皆様にご迷惑とご心配をおかけし、深くお詫び申し上げます」って、これだけ? 1時間停電しただけぐらいの謝り方だと思っただけか?

それに、おかしいではないか。株主総会の会場に、テレビカメラが入っていない。いままでなら、それも構わない。企業の経営に関することだから、一般マスコミがそこまで入れてもらえなくても当然だと思っ。しかし、今回は違うやろ!と書いた。

国民の命がおびやかされているの

だ。マスコミも「今回の株主総会を取材させないのは許せない」と一致団結して戦ってくれるべきだった。

会場の外に出てきた株主さんにマイクを向けて、まとめていたが、なんか手ぬるい。

「委任状」のあり方も見直すべきではないか。そこらの善良な会社さんは別に今のままでいいけど、社会に大きく関わる事業については、もう少し、民意を反映させるものにするべきだ。全株主、持ち株式数に関わらず、1株主1票で、原発賛成か反対か、今の経営陣でいいのかどうか、採決してみてほしい。そういうと、1株買う人が増えてしまうから、アンフェアだというなら、3月11日以前から株を所有していた人とか、過去3年以上、東電株を持っていた人に限定してくれてもいい。「否決、否決」を許したら、アカン!

■警察は国民を守らなくていいんですか?

国の仕事は「国民の安心と安全を守ること」これに尽きる。地震の国に、原発があることで、安心と安全が揺らいでいるとしたら、政治家がどう動くべきか明白ではないのか。経済産業が優先され、放射能のリスクを国民が背負わなければならないなんて、ありえへん。警察も何をしているのだ。出番

ではないのか? 東電本店を守って、福島島の赤ん坊を、国民を守らなくていいのか?

もし、パンに異物が混入していたら、警察は工場を調べ、場合によっては、工場長や経営者に事情聴取をするはずだ。わざと誰かが入れたわけではなくても、もしその異物によって死傷者が出るとしたら、警察は徹底的に調べあげるはずだ。今回は、いいのか? まあ、警察の手に負えない問題だろうけど、それにしても不思議だ。

東電を擁護する人は言うだろう。「今回は、津波による事故やで。何で、警察が調べるねん?」。

理由は一つだ。「国民の安心と安全が、むちゃくちゃにおびやかされているから」だ。福島の人には多かれ少なかれ、原発事故の被害を受けている。とくに第一原発周辺の人々は職を失い、一家が離ればなれになり、自分の家にさえ住めないようにされ、まともな賠償金や補償金も支払わず、生活の不安にさいなまれている。七夕の短冊に「ガンになりませんように」とつたない字で書いている子供の記事が出ていたが、これが「罪」でなかったら、何なのだ。

百歩譲って、あの震災までは「安全」だったとしても、震災後は、安全でもなければ、安心もできないということ、

「フクシマ」が今現在も身をもって教え

てくれているのに、「原発が安心・安全なエネルギー源であること」に変わりはなく、原発反対という意見は否決します」という、この堂々たる欺瞞の刑事責任が問えない、なんてありえへん。

もちろん、東電はじめ電力会社の経営陣があわてふためいて「まさか、こんなことになるなんて。ただちに全原発を廃止する方向で検討に入ります。3年以内には、コレだけを、5年以内にすべてを必ず！」とひれ伏して言うてくれるなら、逮捕される、死刑になれ、とまでは言わない。反対に「えらいことになりましたね。アンタらも所詮、会社勤めで、原発を活用するという時代に、東電に入ったばかりに苦勞するねえ」とねぎらつてあげていたかもしれない。

でも、この期に及んで、「ワシらは何も悪くない。補償はするけど、その分は電気代や」と悪代官以上の悪者に徹するというなら、ゴマメ族もだまっつてはいない。国民投票を！そして、警察よ、立ち上がれ。呑気に本店を守っていないで（東電が勝手にガードマンを雇えばいいのだ）、国民の安心と安全を揺るがしている張本人たちを何十年も遡って、調べあげろ。人命をおびやかすものに「時効」はない。クビ洗って、待つてろ！ 原発反対を唱えた人々を蹴散らし、カネにモノを言わせて推進してきた、ナカソネさん、アンタもやで。（人間魚雷1号）

「偽装」する原子力安全委員会

菅首相が原発依存のエネルギー政策の見直しに意欲を示したとき、元外相の前原誠司は、二〇年かけて原発をなくすのは賛成だが、急激な脱原発はポピュリズムだと批判した。ポピュリズムというのは一面あたっていていると思うが、二〇年先というのは遅すぎる。

エコノミストにも多い意見だが、基本的に脱原発に賛成、二、三〇年かけて徐々に原発を廃炉にする、ただちに脱原発では経済に与える影響が大きすぎる、という立場だ。経済に深刻な打撃となるというが、休眠中の火力発電所を動かせば、原発を全部止めても電力はまかなえると専門家はいう。どちらが事実に近いのか。

二〇年先では遅すぎるというのは、日本列島は地震の活動期に入っているからだ。それは地震学の世界では常識になっているようだが、巨大地震がいつ起きてもおかしくないということだ。幕末のわずか三年の間に、五つの巨大地震が、近畿から関東にかけて連鎖するように起こった歴史をふりかえってみればよい。

このような地震に耐えられるように設計、設置されているはずだが、耐震設計基準の甘さ、不徹底さは地震学者石橋克彦によって明らかにされている。これ

は「専門家」の犯罪といつていい。

一九九五年阪神淡路大震災が起こった二日後に、原子力安全委員会は耐震安全検討会を立ち上げ、九月、地震と震災の調査、研究がおこなわれている最中にもかかわらず、このような大地震をふまえても原発の耐震安全性は損なわれな

いという報告書を発表した。その後二〇〇一年一〇月に活断層が知られていない鳥取県西部で、M7.3の地震が発生し、二〇〇五年八月には宮城県沖でM7.2の地震が起こり、女川原発が耐震設計の基準を上回る揺れに襲われ、〇七年三月には能登半島地震(M6.9)に襲われた志賀原発でも揺れが基準値を上回った。

そして同年七月、中越沖地震(M6.8)が起こり、想定をはるかに上回る地震動が柏崎刈羽原発を襲い、七基すべての原子炉に被害が生じた。このときは幸運にも、運転中は三基のみで、緊急停止し、放射能漏れは微量だった。地震の規模が比較的小さかったこと、大きな余震がなかったことが幸いした。「原発の耐震安全性が実証された」などというやたらがいたが、運がよかつたに過ぎない。

その後、保安院と安全委員会は四基の再開をゆるしている。

柏崎刈羽原発は弾性限度を超えて、歪みが生じていると考えるのが当たり前だろう。明らかな破損やゆがみもあつ

た。歪みは元の状態に回復できないものだ。やっかいなことに、この歪みは目に見えるとはかぎらない。複雑な配管構造をもつ原発をすみずみまで点検することなど不可能だろう。もはや危険な欠陥原発だということだ。危なくて再開なんてできるはずがない。

ところが、安全委員会は再開をしろと。長大な活断層がはしっている可能性があるという指摘を無視してまで、再開させたのである。石橋にいわせると、「原発耐震偽装」である。国も電力会社も推進の学者も地震なんて大したことな

いとなめきつていたということだ。もう一つ深刻な問題は、二〇年原発が稼働しつづけることによって、放射線に汚染された膨大なゴミが蓄積されるということだ。しかもそれを何百年と監視つづけなくてはならない。ゴミ問題は述べるまでもないだろう。このゴミをモンゴルに押しつけようなどという計画もあるが、もつてのほかだ。

はじめに、前原のポピュリズムという批判は一面あつていていると書いた。六月の世論調査では「原発廃炉推進」支持がいつきに八〇パーセントを超えた。事故を目の当たりにし、原発の正体、安全神話の身を知れば当然の反応だろうと思う。と同時に、振り子が大きく振れるように脱原発に傾くことに、一種の気持ち悪さを感じるのだ。（つづく）（猿）

ドイツ時代③（70年12月、75年5月）

土田 裕

ドイツ人氣質

ドイツに駐在していたのでドイツ人との商売が多いと思われがちだが、私の主たる担当はブリジストン社の自動車タイヤ輸出であり、ドイツ、デンマーク、スエーデン、アイスランドが当地域であった。合成ゴムや自転車部品ではドイツ人との取引もあったが、他国との商売のほうが多かったのでドイツ人と他国人との性格、商習慣の違いなどが体験できてその後の会社生活で大変役にたった。私見ではドイツ人の性格は「勤勉」「頑固」「規則厳守」に要約されると思う。時間厳守で良く働く点は日本人と同じであるが、日本人と違うのは、幹部は別として一般の従業員は原則として残業は一切しないという点である。また筋が通らない話

は受け付けないので日本人的な「理屈は通らないかもしれないが、そこを何とかお願いしたい」という顧客からの要望を現地スタッフに納得させるのは至難の業となる。

一九七一年二月、いわゆるドルシヨックが勃発し、それまで一、二六〇円であったものが三〇八円に切り上げ

となつた。

当時は日本の経済力はまだ弱かったので円建て契約は皆無であり殆どの契約はドルまたはマルク建てであった。従ってドル建て契約は値上げしないかぎり約一五パーセント損をすることになる。例えば千ドルの契約があれば今までなら三十六万円入金したものが三十万八千円になる。

そこで日本側からは相次ぐ値上げ要求がくることになるがドイツ人客先は「新しい契約からは値上げもやむを得ないが、すでに契約済みのものまで値上げは一切認められない」と理詰めである。ドイツ語での折衝はドイツ人スタッフを頼りにせざるをえないので、まず彼らを説得することから始めた。理屈はともかく「そこをなんとか」という日本語を覚えさせたがその後、日本から無理を言ってくると現地人スタッフから「また、そこをなんとかですか？」といわれる始末であった。

ドイツ人はよく行列をつくる。タクシー乗り場とか、特売売り場でも礼儀正しく行列をつくっており、割り込みうとする不心得者がいると大変な口げんかが始まることになる。パリに出張した時、ドイツと同じようにタクシー乗り場で順番を待っていたら、前の方にどんどん割り込まれていつまでたつても乗れなかったのを覚えている。

ナチスの時代にユダヤ人摘発のため

密告を奨励した名残か、街角で終日座つていて交通違反者を直ちに警察に密告する老人が多くいると聞いた。

ドイツ人は品質の良いものを買って長く使う精神が徹底しているので、電機製品メーカーもそれに対応して補修用部品は発売から十年間の保管を義務付けられている。

オイルシヨック

本稿を書いている途中、三月二日、東北東日本大震災が勃発した。翌日スーパーへ買い物に行つて驚いた。パン、牛乳、弁当、レトルト食品、即席ラーメンなどが店頭から消えておりレジは長蛇の列である。被災地ならともかく、私の住んでいる川崎市には災害は殆どなかったにも拘らずである。帰宅途中、道路が大変混んでいるのでどうしたのかと思つたら、ガソリンを入れるために順番を待っている車の列であった。

この光景を見て一九七三年、ドイツで遭遇したオイルシヨックを思い出した。いわゆるメジャー五社が一〇%の原油供給削減を発表したとたんに値段が急騰、最終的には四倍になった。当時、日本から来るニュースでは石油製品中心に物価が急騰し買占めが起り、トイレトーパーすら不足しているとのことであった。当時ドイツではガソリンの

値上げもそれほどではなく、買占めも

道路混雑もおこらなかつた。理由はドイツは中東との関係も悪くはなかつたが、メジャーにコントロールされてないリビアとの間で長期契約があり、油は全く不足していないとのことであった。

一方日本は米国に気を遣つて、米国に反抗するリビアとは油の取引がなかつた。天災とオイルシヨックではやや事情が違うが、当時日本で起こつた物価の急騰、買占めがドイツでは全く起こらなかつたのを見ると、国家の政治力だけではなく国民の性格で付和雷同はしないという点ではドイツ人のほうが優れているように思う。ただ阪神大震災の時もそうであったが、被災地で略奪や騒乱がおこらず住民が辛抱強く助け合っている姿は世界中から賞賛されている。

国境

日本は島国なので日本にいるかぎり国境を自動車で通過することはないが、欧州に駐在するとよく経験することになる。ドイツの周辺国でも自由圏のオランダ、フランス、スイス、オーストリアなどは国境といつても立て札があるだけで検閲もなく往来は自由である。

私がドイツにいた頃はドイツは東西

に分断されており、ベルリンも東と西に分かれていた。西ベルリン市は人口百八十万、西ドイツ最大の都市であるが、東ドイツの中にあり、ハンブルグから西ベルリンに車で行く場合は東ドイツの通過許可ビザを取って東ドイツ国内を走っていくことになる。ハンブルグの郊外にある税関でビザを取って緩衝地帯に入ると約二十メートル幅で何も無い荒地があり、東ドイツ側には2メートルくらいの塀と有刺鉄線が連なっていた。西ドイツの高速道路はアウトバーンと称して速度制限なしであるが東ドイツに入ったとたんに速度制限(確か百キロであった)があった。それもそのはずで当時は東西にかなりの経済格差があり、東に入ったとたんに道が凸凹で、スピードを出そうにもだせない状態であった。東ベルリンと西ベルリンの境にも国境があるが、こちらの方は非常に厳重なチェックを受けてからでないと通過できない。チェックポイント・チャーリーという検問所で一日ビザを取って東ベルリンへ入るが、その際、強制的に最低二十五マルクを東ドイツマルクに等価交換しなければならぬ。当時、西ドイツマルクの価値は東ドイツマルクの一〇倍くらいであったので東ドイツ側の外貨稼ぎの手段であった。

我々外国人の場合はそれでも通過は

比較的楽であったがドイツ人の場合は身体検査はもちろん車のトランクや下まで厳重にチェックされる。西ベルリンから東ベルリンへは入れるが東ドイツの一般人の西ベルリンへの入国は許可されていなかった。東ドイツの人が西ドイツへの逃亡を試みて何度も射殺されたというベルリンの壁が市を縦断して建っていた。私も数度は東側へ入ったが、自動車はトラバンドというプラスチック車体の自動車が一種あるだけで、生産が少ないので一年以上待たねば買えないとのでであった。当時から西ドイツではベンツ、BMW、フォルクスワーゲンなど世界的な有名なメーカーがあったので、その格差は歴然としていた。私も東ベルリンのレストランで食事をとったことがあるが不味かったし、フォーク、ナイフがアルミ製で異常に軽かったことを覚えている。

一九九〇年に統一ドイツが誕生して、東西を分断するベルリンの壁がなくなつた。ただ経済格差は容易に解消せず統一後二十年経っても賃金だけでなく、失業率にもかなりの差があると思われている。

オリンピックとワールドカップ

私がドイツにいる間にミュンヘン・オリンピック(一九七二年)とサッカー

ワールドカップドイツ大会(一九七四年)が行われた。両方とも四年に一度の開催であり、また開催地は世界中に散らばっているのが、五年間の駐在中に両方開催されたことは奇遇であった。もともとオリンピック開催中も休暇はとれないし、そのうえ入場券を手に入れることは至難の業であったので家でテレビ観戦するのがせいぜいであった。当時、日本は体操、バレーが強かつた。確か金メダル十三個をとつたと思う。オリンピック開催中にパレスチナ武装組織がイスラエル選手九名を人質にとりイスラエルで収監されているパレスチナ人二三四名の釈放を要求する事件が起こった。イスラエル政府が釈放を断固拒絶したため、ドイツ警察は武力解放しか方法がなくなり長時間交渉が行われたが、結局双方が妥協せず、特殊警察が機内に突入し、犯人五人を射殺したがその際イスラエル選手の人質九名も犯人側に射殺されて終つた。本事件に限らずドイツで人質事件が起こるとたいいていの場合、犯人は降伏しない限り射殺されるし、人質も巻き添えを食うことになるので間違つてもドイツでは人質になりたくないと思つた。後にテレビで見たのだがハンブルグ市内で銀行強盗事件があり、犯人が人質を前に抱えて外に出てきたとたんに物陰に潜んでいた警官が犯人を射

殺してしまつたのには驚いた。この点では一九七〇年に赤軍過激派が日航機を乗っ取り平壤へ逃げた時「人命は地球より重い」として収監されていた過激派を釈放した当時の福田首相の対応とは対照的でどちらが良いとは誰も断言できないが、一切の妥協を嫌うドイツ人の性格がここでも発揮されているのだと思う。

ドイツ人は大変なサッカー好きでブンデスリーグ(日本でいうJ1)の試合は毎日テレビで放送しているし、ワールドカップはオリンピックよりもはるかに人気があり入場券を入手するのはほとんど不可能であった。また当時は日本はサッカーリーグもなく、当然ワールドカップに出ることもまた夢のまた夢であった。近年、日本は連続してワールドカップに出ているし、現在は長谷部、内田、香川、岡崎などの有力選手がブンデスリーグのチームで活躍している。一九七四年ドイツワールドカップ決勝戦は西ドイツとオランダの間で行われ西ドイツが二対一で勝つたのでドイツ中がお祭り騒ぎとなった。その後二〇〇六年にもワールドカップドイツ大会が行われてイタリアが優勝し、ドイツは三位であった。



女の残像

具志 清

嵐山の三日後、久実は帰郷することになった。高井は、その日の昼下がり、久実に指定された京都駅前の喫茶店へ約束の時間より一時間ばかり早く入った。

久実が、嵐山で、小さな送り火を見送りながら、言った。

「京子さんは、あたしが昭和十一年生まれだから、八つばかり年下だったのね、そんなにお若くして。病気ならともかく、交通事故だなんて、ほんとうにお可哀相」

「不運としか、言い様がないよ」

「京子さんは、お母さんを亡くされて、お独りになり、寂しかったのよ。あたしも一人っ子だからよく解る。自分の心を語る相手が欲しかったのね。御両親を偲んで京都に来て、偶然に出会ったタカさんとお手紙を交しているうちに、タカさんをお兄さんのような気になったのかも知れないね」

「そうかな、歳は一回りほど違うけど」

「あたしもね、子供の頃、お友達の家遊びに行った時など、お兄さんに甘える子を見ると、とても羨ましく思ったの。タカさん、ご兄弟は」

「四つ上の兄が一人、大阪の小学校で教師をしている」

「お二人兄弟でしたら、お仲がいいでしょうね」

「そうだな」

「お兄さんは、戦争に行かれたの？」

「予科練で終戦を迎えた。大学時代はアルバイトに忙殺され、学業との両立は困難を極めたようだ。ぼくの場合は、親の古物商が軌道に乗り出した頃、大学へ入ったから、兄よりは楽だった」

「戦中戦後、随分御苦労なされた世代ね。タカさん、お嬢さんがお二人でしたね」

「この春、上が小学三年と、下が新生となる」

「これが大変でしょうけど、お楽しみだね」

「子供の事は万事女房任せだ」

「奥さん、良妻賢母のお手本みたいな方でしょうね」

「口の悪い友人は、お前には勿体ない、なんて言っているよ」

「きっとそうよ、調子に乗って、タカさんは飲んでばかりでは駄目よ。たまには、さっさと帰って、奥さん孝行して上げてね。あら、あたしがこんな事言っておかしいわね。酒飲みのタカさんだから、お付き合ひさせて頂いたのですものね」

バーのカウンターを挟んで十年も交流していると、時にはお互いの事情も問答し、多少解ってくる。久実の父親は、名古屋で工場技術者の職にあつた。戦時中、軍属として大陸へ派遣された。終戦後直ぐに帰国は出来たが、重い病を患っていた。職場に復帰する機会もなく、あつてなく世を去った。母親は、娘時代に学んでいた洋裁の知識を生かし、辛うじて生計を立てた。実家が近郊の農家だったのが、食糧難の時代、大きな助けになった。ともかく、佐藤母娘も、戦後を必死に生きてきた。

久実は、離婚の事情については、多くは語らなかつた。この二、三年、盆や正月に帰郷する度に、母親の周辺から、結婚話が出たが、全て旨く行かなかつた。

ある宵、デミアンでの会話の中で、久実は言った。

「縁がないのよ。でも、京子さんのように強い信念はないから、母を安心させるためにも、もう一度結婚してもいい、と思つてはいるの」

嵐山でも、久実の結婚話は話題に上がった。

「最近の母の手紙に依ると、今度は、母は自信があるみたい。相手の男性とも、その御家族とも会つて、お互いに

気が通じたらしいの、後はあたし次第、と言うわけ。あたしも贅沢の言える身じゃないし、お会いしてみても、母を大事にしてくれそうな人なら、母を一日でも早く安心させたい、と思つて」

「クミさんは、お母さんの事も大事だが、自分自身の幸福を第一に考えるべきだ」

「いいの…、あたし…」

「クミさんは、素敵な女性だよ。きっと幸福になれるとも。名古屋にクミさんを全霊で理解してくれる男性がいる、とぼくは信じてたい」

「ありがとう…」

戦後四半世紀を経て、平和と繁栄を謳歌する時代に成つては来たが、佐藤母娘や里見母娘の戦後を考えると、戦争の影を引き摺って生きている人々が、未だ居るのだ、と高井は思わざるを得ない。

高井が思い巡らしていると、ポン、と肩をたたかれた。振り向くと、久実である。「待った？」と微笑しながら、高井の前に腰かけた。

「二、三十分ばかり」

「お仕事はいいの？」

「クミさんのために、午後はサボる事にした」

「ありがとう」

「今日はシックな装いだな、デミアンの時は、ちよつと雰囲気が違うな、さて、

どう表現したら良いか、そうだ、あの画だなあ」

「あら、また？、今度はどんな画？」

深緑色のワンピースは、同じ布地のマフラーに巻かれた襟元から、膝下の中程まで降り、腰は、これも共布のベルトで締められている。無駄な装飾を省いたシンプルさが、清々しい。それに、丹青の格子縞のジャケットを、五つの釦をはずし、羽織るように着ているのも、爽やかである。

「青木繁の『わだつみいろこの宮』を思い出した」

「ふーん、『海の幸』はよく知っているけど、そんな画、はっきりとは覚えてないわ」

「縦長の画だが、古事記の海幸彦山幸彦兄弟の神話を題材にしている。山幸彦が海の底の宮で、海神の娘、豊玉姫と出会う場面だ。山幸彦が画面の中央、海底から伸び上がっている樹木の枝に腰かけている。その樹下で二人の女が甕を捧げ持って山幸彦を見上げています。右に白衣の侍女、左に紅衣の豊玉姫を配してある。その姫の立ち姿を思い出したのだ」

高井は、その構図を、カバンから取り出したノートに、記憶を辿りながら、簡単に描いている。その巧みな鉛筆の動きを見ながら、久実は、聞き入っている。

「タカさん、絵もお上手なのね」

「高校時代、画家になろうか、と思っただこともある」

「小説家を志したこともあった、と仰っていたわ」

「どちらにも成り損ねた。はっ、はは……と高井が笑うと、久実も、釣られて「ふっ、ふふ……」と笑った。

「タカさんは、文学にも詳しいものね、もつともつと教えて頂きたかったわ」

高井は、デミアンへ入り始めた頃、その店名が気になっていたので、尋ねてみた。

「ママさん、デミアンと云うのは、ヘルマン・ヘッセの小説に由来するのですか」

「あら、そうですね、よく御存知ですね」

名古屋の本店の客が、京都の新しい店のために考えてくれた、という。高井は、高校時代、ヘッセの『郷愁』『車輪の下』『デミアン』の三作を読んでいた。『デミアン』は青春小説の名作である。ひとりの少年が、デミアンという

名の友人と、その母との親交の中で多感な青春時代を過ごし、成長していく物語である。

高井は、ママの求めに応じて、四方山話の外に、東西の文学作品について

も話題に上げた。パーの名と、久実というママの気さくな性格が気に入り、十年も通い続けた。

「その姫は、くれないの布を纏っている。襟元から長く垂れて、その裾は底まで広がり、姫の素足で踏まれている。姫のからだは、薄い布から透けて見え、美しくも艶かしい」

「まあ、それがあたしに似ているの？」

「夏目漱石が、この画を東京府勸業博覧会で観て称賛したようだ。『それから』の中で、主人公、長井代助の、この画に関する感慨を描写している」

「あたし、高校で漱石は二、三読んだけど、『それから』は未だ読んでない」

漱石は、次のように書いている。

（いつかの展覧会に青木といふ人が海の底に立ってゐる背の高い女を描いた。代助は多くの出品のうちで、あれ丈が好い気持ちに出来てゐると思った。つまり、自分もあゝ云う沈んだ落ち付いた情調に居りたかつたからである。）

高井は、背の高い女、つまり豊玉姫の横顔を久実を重ねてみた。

「また、じろじろと見るのね」と久実は笑った。

「うん、描かれた姫の横顔がクミさんに何となく似ている」

「この前は、『黒船屋』の娘さんだったのに」

「どちらにも似ている」

「無理しないでよ、でも嬉しい。あたし、その二つの画集を探して、切り抜き、額に入れてお部屋に飾っておくわ、京子さん、あの『湖畔』も一緒に並べるの」

話は尽きなかったが、高井は腕時計を見た。

「そろそろ時間だね」

「そうね」

久実は和布のバックと旅行鞆を携えていた。アパートの部屋と家具類は名古屋の本店が用意したもので、それらはそのまま新任のママさんへ受け継がれた。久実は、衣類や身の回りの小物類は既に実家へ送ってある。かくして今日の出発日は身軽である。

高井は久実の鞆を提げた。二人は喫茶店を出て、駅前の雑踏を抜け、駅構内へ至るまで殆ど黙って歩いた。

新幹線のホームで高井は鞆を久実の足元へ置いた。

「佐藤久実さん、元気でな」と高井が手を差し伸べる、久実がそれに応じて、二人は軽く握手を交わした。

「高井隼人さんも、どうかお元気で。お仕事も御家庭も、お大事にして下さい。ほんとうに御世話になりました。」

ありがとうございます」

久実の瞳が微笑の中にも潤んでいた。

「世話になったのは、ぼくの方だ、ありがとう、良縁を祈っているよ」

「ありがとうございます」

久実は、涙を堪えている表情になった。

高井は、敢えて微笑して二、三度頷いた。

大阪の方から新幹線が入ってきた。

久実は窓側に坐った。二人は笑顔を向けた。列車が動き出した。

高井は、戦時中、海洋少年団の訓練で習った海軍式の敬礼を、颯と送った。久実は、それを真似し、につこりと返礼した。

列車はあつと言う間に疾走し去った。新幹線での別れはあつけない。高井は、暫くホームに立ち尽くし、列車が消え去った東の方向へ視線を送った。

高井の想念の中に、京鹿子紋様の着物姿と黄八丈の和の装いの二人の女の残像が浮び上がった。

完



米寿の挑戦

天保山から四百八十⁺歩き富士山に登ります。

戸田 巽 ◆大正十三年十二月生

(甲子園球場が出来た年で)

○ 僕の人生観

「一度しかない人生だから、納得のいく人生にしたい」

○ 第二の人生は、自分の能力の範囲の趣味を楽しみ、節目・節目には自己満足の趣味の挑戦をすることを納得のいく人生としている。

○ 趣味は右脳に弱点があり、登山・スキー・切り絵・ウォーキングと運動に偏ってしまう。

○ 運がよく若い頃の腰痛以外は内臓疾患がなかったので、

★古希には、登山でキリマンジャロ(5895m) 登頂

★喜寿には、登山でアララット山(5165m) 登頂

★スキーで札幌国際スキーマラソン五十⁺完走

★傘寿には、切り絵で個展を大阪で開催大勢の仲間を支えられて、挑戦の達成感を味わうことができました。

○ 「夢を描き、挑戦し、凜として生きる」を信条としていた僕ですが、傘寿を過ぎたころから急に気力・体力が弱くなり、六十

一年間生活を共にした妻とも二人三脚・老老介護・独居老人主夫と目まぐるしい変遷で登山・スキーは遠のき、白内障で切り絵も中止、最後の趣味にしていた挑戦的ウォーキングも健康ウォーキングに弱体化しました。

○ ところが、内臓疾患のないことを喜んでいて僕ですが、突然八十四歳の時に悪魔が侵入、胃癌・肝臓癌を告知されました。病気はドクターの研究材料であり僕は無関係と非常識な割り切りかたをして三年、米寿の節目となってしまいました。

○ 節目の挑戦は挑みたいので、弱弱しくなったウォーキングですが趣味の原点である登山と組み合わせる「米寿の挑戦―天保山から四百八十⁺歩き富士山に登る」を企画したようなどころです。

○ どこでボタンの掛け違いをしたのか、僕の人生は挑戦で終わりそうです。もし、挑戦出来なくなれば、挑戦した記憶が僕を一生支えてくれるでしょう。

追記(梵店主)

先日、戸田さんより頂いた、メッセージを記載させて頂きました。今日、八月一日に来店され、以前から希望されていた「負けるな！よっちゃん」第一部を10冊ご購入し

て頂きました。大変恐縮しました。戸田さんが、12日からの計画についての心境を語られました。

「天保山から御殿場まで無事歩ける可能性は50パーセント、富士山に登れるのは10パーセントだと思おうようになった。一昨日も娘が付き合ってくれて、高槻から長岡京を経て亀岡を回って高槻まで35キロを歩いてきたが、どうも調子がよくない。昨日は、愛宕さんに登ったが、下りが手こずった。やっぱり歳かなと思う」

私は、付いて歩いてサポートしたいが、迷惑かけるだけだから、「大丈夫ですよ」としか言えなかった。

俳句

土田 裕

父母の逝きし歳月盆の月
暮れてよりいよよかしまし蟬時雨
ふるさとのつくつく法師優しかり

新涼の庭の草木は葉裏見せ
願ひごと書き日は遠し星祭

晶男

緑萌ゆ北の大地や賢治の郷



体の不調

六月のはじめ、近年まれにみる風邪をひいてしまった。夏風邪がくるなんて、のんきにかまえていたら、それが十日たつても十五日がすぎても、体調が思わしくない。背中がぞくぞくついたり、肩がこつたり、今一つはつきりしない。

夜は早めに寝て、自分なりに養生していたつもりであった。いつもは、医者にゆき、一週間分頂いた薬も三日しか飲まず、三日寝れば、完璧に治っていた。

ところが、今回ばかりは、いくら寝ても体調がはつきりしない。でも、まあ、後期高齢老年期に突入しているし、こんなものかと思いつつ、予定通りに用事はこなしてきた。

日課にしている手洗い、うがいを念入りにやっても、夕方から夜にかけてひどくなる。おまけに耳も変だ。熱はなく食欲もない。布団に入ったら、またセキ、セキに追い込まれる。一緒に寝ている安ベエーがびっくりして「ワンワン」と泣くだけ。ここで背中のひとつもさすってくれればありがたいのだが。

ふだんの風邪とは違う状態に、また医者に行く。「薬は不要、注射一本だけで結構です」

私が、一番おそれていたのは肺がやられたのではないかということだった。いくら何でも、こんなひどい咳がつづいた経験がない。

先生はいう。「いちおう咳止めの飲み薬と注射にしておきましょう。みなさん長引いていますよ。治るまでひと月もかかった人もいますよ」

「はあ、そうですか」
大事に至ってなかったのはよかったです。完治までにひと月もかかるのかと思うと、うんざりしてしまつた。

れんこん汁
ひどい咳には、れんこんの摩り下ろし汁がいいと聞いたので、早速買ってきて、すりおろし、ガーゼでしぼって汁を飲む。やつと、咳がほっとするのがわかつた。「これはいけるかもしれない」と期待しても、即効性は全くない。

灰汁が出るからつくりおきが出来ないの、夜半に咳が出ると、あわててれんこんをすりおろす。安ベエーも同じように起きてきて何の助けにもならないが「ワンワン」を連発しながら、おろろしている始末だった。おちよこ一杯ほどを飲んで、少し落ち着きまた横になる。それを繰り返した。

薬は手元に置いておけないと思いきや捨ててしまった。長引く咳に友達も驚

いていたが、いちばんびっくりしたのは自分だった。

信用出来るのは自分が治そうとする努力のみである。れんこんのすりおろし、過食はやめ、野菜中心の食事、甘いものを控えめを続けているうちに、咳も軽くなってきた。自分でも少しおかしいと思いつつも無理を重ねてきた事も、自業自得だから誰にも怒りをぶつける事も出来ない。

ここで気を抜いてはいけませんが、もう治つたも同然だった。日課にしていた一日一時間から一時間半の買い物も控えて早めに家へ着く。

「こんなに辛かったから、ちよつと瘦せたかも」自分の身体を見て驚いた。腕から下腹、しわ、しわ、咳をするたびに身体中がふるえていたのだ。マッサージの効果はなかったらしい。

夜の咳は、ほとんど治つたものも、誰かと話しをしようと思うと変に咳模様が見れる。「なんだこりゃあ、しゃべるな」ということか。

編集後記

おかげさまで、60号まで続けて発行できました。投稿していただいた方や購読し続けてくださった多くの皆さんに心から感謝を申し上げます。

この間、色々な出来事がありました。毎月「芥川だより」を出すという生き甲斐が生活のリズムをつくり、結果として元気に過すことが出来ました。なによりも多くの方々とお知り合いになり、交友の輪が広がった事が大きいです。

様々な人生模様を本音で書いていただき、拝読するたびに、新たな発見がありました。日常の会話では知りえなかった思いや経験を知り、人の生きてきた奥深さをしみじみ感じます。

一言で言い表せない人生を今後も皆さんのご支援を頂きながら「芥川だより」の紙面で描いていきたいと思ひます。比較できない人生ではありますが、似たような経験や思い出はきつと皆さんの励みや癒しになると思っております。

芥川商店街歳時記

高槻まつり

8月6・7日

6日夜六時頃、商店街を本場の阿波踊り連が通ります。

7日夕方

芥川商店街の神輿が商店街を練り歩きます。ケヤキ通りのパレードにも参加して高槻まつりを盛り上げます

着物から服を仕立てます

梵~ほん~